

2022年(令和4年)

11月例会

日時：11月19日(土) 14時より

講師：國學院大學 町田 樹

題目：フィギュアスケートを対象とする比較芸術学的研究の可能性
——1970-80年代ジョン・カーリーとバレエ界の協働創作を事例として——

司会：東洋大学 佐々木悠介

12月例会

日時：12月17日(土) 14時より

講師：同済大学(上海) 林 茜茜

題目：戦後における小田嶽夫の中国表象

司会：東京大学(名誉教授) 井上 健

INSIDE THIS ISSUE

1. 11月・12月例会案内(オンライン開催)
2. 例会要旨等
3. 東京支部短信

役員連絡会開催のお知らせ

2022年11月例会終了後、オンラインにて開催します。
(役員連絡会の構成員は支部長、事務局長、各種委員会委員長、事務局委員です。委員会の委員、幹事は含まれませんが、陪席を歓迎します)

11月例会発表要旨

フィギュアスケートを対象とする比較芸術学的研究の可能性 ——1970-80年代ジョン・カリーとバレエ界の協働創作を事例として——

國學院大學 町田 樹

スポーツ文化と舞踊文化の境界に位置付けられるフィギュアスケートは、その特性上、「競技性」と「舞踊性」の両義的性質に伴う美学・芸術学的問題を数多く抱えている。本発表では、そうした問題系の一つに含まれる、フィギュアスケートとバレエのジャンル間「コラボレーション」について取り上げていきたい。

フィギュアスケート界では1970年代後半から80年代にかけて、バレエ界の舞踊家と協働して作品を創作するコラボレーションが、ある一人のスケーターを中心に活発に行われた。そのスケーターとは、ジョン・カリー (John Curry, 1949-1994) である。彼は、英国代表として1976年のインスブルック冬季五輪で優勝を果たしたのちに、プロへと転向。ケネス・マクミランやトワイラ・サープ、ローラ・ディーンなどの舞踊家と積極的に協働創作し、それをスケートリンクではなく、ニューヨークのメトロポリタン歌劇場やロンドンのロイヤル・アルバート・ホールなどの名高い劇場で上演した。

元来、音楽と共に滑って踊るフィギュアスケートは、19世紀半ばにニューヨーク出身のバレエマスターであるジャクソン・ヘインズによって形作られたと言われている。ゆえに、フィギュアスケーターがバレエというジャンルから「影響を受け」、表現を行うことは何ら不思議なことではない。ところが意外なことに、約150年に及ぶフィギュアスケートの歴史の中で、バレエ界とのコラボレーションが活発に行われたのは、1970-80年代におけるカリーの活動を置いて他にないのである。なぜカリーと舞踊家は積極的に協働したのか。それらの作品の真価はどこにあるのか。本発表では、こうしたコラボレーションの可能性と限界について、エクスプリカシオン・ド・テキストをはじめとする比較文学比較文化の諸理論を用いながら多角的に考察していきたいと考えている。

12月例会発表要旨

戦後における小田嶽夫の中国表象

同済大学（上海） 林 茜茜

小田嶽夫(1900-1979)は日本の小説家で、中国近現代文学の翻訳家および研究者としても知られている。1924年に杭州で外務省書記員を4年間務めたのを機に、中国を素材とする作品を創作しはじめた。特に杭州領事館における体験に基づいて書かれた「城外」(『文学生活』、1936.6)で第3回芥川龍之介賞を受賞後、文壇において一目置かれるような存在になった。

小田は生涯に4度中国へ渡っているが、そのうちの3回(1924-1928年杭州、1937年上海、1939年北京・満州)は戦前である。戦後には、1956年9月に中国人民対外文化協会の招待で、日本文人訪問使節団の一員として草野心平や檀一雄らとともに中国を訪れ、約40日間にわたって中国各地を視察した。帰国後、「杭州彷徨」(『新日本文学』、1957.3)や『望郷』(学習研究社、1964)、『漂泊の中国作家』(現代書房、1966)など中国を題材にする作品を立て続けに創作している。

従来の研究は、小田の魯迅や郁達夫の研究者である面や、戦前の中国体験を描写した作品に注目するものが多く、これら戦後の作品は長い間等閑視されてきた。しかし、これらは、生涯にわたって中国に目を向けた小田の中国観を理解するのに看過すべからざる重要な作品である。

小田は、27年ぶりの中国再訪で何を感じたのか、そして戦後の中国をどのように描いたのか、本発表では、主に上記の作品に注目し、戦後の中日関係や社会背景なども視野に入れながら、戦後における小田嶽夫の中国表象の一端を明らかにしてみたい。

東京支部短信

当面の例会運営に関するお知らせ

- ①例会開催の概要は、昨年夏まで印刷物のニューズレターで年2回、3月と9月にお知らせしてきましたが、今後は、年4回に分けてホームページに情報を掲載する予定です。3月に4月、5月分の、6月に7月、9月分、10月に11月、12月分、さらに12月には翌年1月、3月分の例会情報（日時、発表者名および題目、要旨）を掲載します。
- ②オンラインによる例会開催については、当面、以下のように連絡する予定です。該当月の例会開催日の1週間前に、支部会員向け一斉メールで、開催内容（ホームページ掲載と同様）とともに、当日 Zoom に入室するための URL を送付します。その際、ホームページにも、会員に入室用 URL を送付した旨を掲載しますので、メール不着の場合は事務局にご連絡ください。
- ③例会開催時は、従来配付していた発表者の資料は、画面共有で見えることを基本とします。発表を希望される方は、パワーポイントやワードなどで、当日の資料を作成することをご了解ください。なお、資料は、発表原稿そのものではないものとします。また、発表者は、音声のみの参加ではなく、カメラ使用を基本とします。
- ④ Zoom への入室は、メールで送付された入室用 URL をクリックすれば可能です。当日の参加に際しては、発表中はカメラ・音声をオフにさせていただきます。

電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』への投稿について

電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』は、毎年一回、3月末日に発行されます。新型コロナウイルス感染症の流行が続き、研究発表の機会が少ない現状に鑑み、研究論文投稿資格を有する者は、**東京支部会員のすべて**とします。なお、多くの大学、研究機関では電子的な方法で発表された論文についても、正規の研究業績として認められています。投稿論文の提出期間は11月1日から11月30日まで、送付先は下記の通りです。ふるって投稿ください。お待ちしております。

日本比較文学会東京支部編集委員会委員長 椎名正博 pegasus@w2.dion.ne.jp
詳しい投稿規定および執筆要領、投稿用のテンプレートは東京支部ホームページに掲載されていますので、どうぞご覧ください。ご質問がある方は支部事務局に電子メールでお問い合わせください。

月例会発表者募集

支部月例会の発表者を募集しています。申し込みは支部事務局 (hikakubunga kutokyo@gmail.com) に氏名、所属、題目、連絡先(メールアドレス、電話)を明記したうえで、600～800字の要旨を添えて電子メールで送信、または郵送でお願いいたします。支部役員に託されても結構です。発表時間は45分(質疑応答を除く)です。

東京支部事務局より「お知らせ」の配信について

東京支部では支部会員みなさまにメールマガジンの「お知らせ」をお届けしています。原則として毎月1日発行で、例会や支部大会などの情報を掲載しています。これまでお手元に届いていない方は、日本比較文学会東京支部の支部会員のページの「お知らせ」のウェブサイト (<https://www.hikakutokyo.com/mm>) のフォームにご記入のうえ「配信希望」をクリックして下さい。メールアドレス変更の場合も、お手数ですが、新アドレスで再登録をお願いします。

日本比較文学会東京支部ニューズレター 136号

発行人：佐藤 宗子
編集委員会(編集担当)
委員長：椎名 正博
委員：鈴木 美穂 堀江 秀史 安元 隆子 庄子 ひとみ
事務局
事務局長：源 貴志 会計担当：南平 かおり
事務局委員：川野 礼音 小泉 泉 土田 久美子
芳賀 理彦 畑中 健二 蒔田 裕美

JCLA

日本比較文学会東京支部

事務局住所
〒162-8644
東京都新宿区戸山 1-24-1
早稲田大学 文学学術院
源 貴志研究室
TEL : 03-5286-3725